

第8回国際空中生物学会議（スイス）の演題から

○林 節男（富山県立大学短大部）、寺西秀豊（富山大学医学部）

同会議は2006. 8.21～8.24にスイス西部のフランス語圏ヌシャテル市で開催され、世界45カ国から250名余りの医療、生物学、気象学、地理学等の研究者が集い、境界分野の問題である空中花粉や空中のカビや胞子のモニタリングやその影響と対策について最新の研究課題が報告され、討議された。部門として、測定法、飛散モデルとシミュレーション、気象との関連、植生との関連、健康問題等の多方面から280余りの研究発表と討議がなされた。日本からは林、寺西と農業環境技術研究所の川島さんの3名が出席した。

今回はスイスの気象観測機関（MeteoSwiss）が会議の運営の中心となったこともあり、ヨーロッパ地域の気象観測と花粉飛散および植生の変化との関連に関する各国の共同調査報告が目立った。気象には国境が無いように、花粉や胞子の空中飛散についても国境を越えて注目して行こうという気運が高まっているようだ（Monalisa 計画）。

林は現在、ナシ園で行っているアレルギー性空中花粉と微生物の飛散調査について口頭発表を行い、生産者の花粉症対策として、ナシ園の植生と季節変化に対応した花粉と微生物カレンダー作りの大切さを訴えた。会場からは、ナシ生産者での花粉症の症状者の割合やアレルギー性の胞子（人工授粉時の花粉増量材、石松子や、環境中の空中胞子）について質問が出た。私以外の発表でも、ナシ園で観測しているアレルゲン胞子（アルタナリヤ等）について、5～6件の研究発表がなされていたので、連帯感を得ることができた。

寺西は花粉の蛍光観察を応用した新自動計測器（Kowa Kp-1000）と従来型の‘バード’型計測器の比較について、川島さんはレーザー光による空中花粉の識別計測法について発表した。これら新しい計測法は、日本が先駆けている国の一つようで、会場から多くの質問が寄せられた。会議全体のプログラムの構成と雰囲気等については、発表PowerPointで示します。

以下にKeynoteの演題（演者）と報告者が目についた一般演題を列挙する。

Molecular Approach to Biodiversity in Aerobiology: A Case Study (A. McCartney)

On the use of numerical modeling to simulate regional climate change (S. Goyette)

Metagenomic Analysis to Determine the Microbial Composition of New York City Air (N. Judson)

Aeropalynology in Russia (E. Severova)

Pollen and crime (D.C. Midenhall)

Knowledge Gaps and Hot Topics in Aerobiology (C. Rogers)

<報告者が目についた一般演題>

MONALISA: Monitoring Network of Allergens by Immuno-Sampling (仏、英、ポルトガル、ポーランド、フィンランド、スペイン、スイスの機関が共同参加した免疫法のアレルゲン観測ネットワーク)

Field-experiment on vertical pollen transport in the alpine valley of Nendaz, Switzerland

Seasonal distribution of fungal spores in indoor air, Austria

A rice production simulation model in relation to *Pyricularia grisea* (Cooke) Sacc. airborne inoculum